

市制 70 周年記念特別展

追分の人形芝居展



^{おいわけ}追分の人形芝居は、江戸時代の中頃にこの地を訪れた^{あわじ}淡路の人形遣いによってもたらされたと伝えられ、庶民の文化として定着し受け継がれてきました。

昭和 35 年 11 月 7 日に山梨県指定無形文化財としての指定を受け、その後、条例改正に伴い無形文化財から無形民俗文化財と指定区分が変更し、現在に至っています。このことは、追分の人形芝居が山梨県を代表する貴重な文化財として古くから注目されていたことを示しています。

本特別展では、大月市^{ささご}笹子町に伝わる追分の人形芝居について、公演を鑑賞するだけではわからない歴史や魅力について紹介します。

笹子の歴史

大月市の西部に位置する笹子町は、鎌倉時代には隣の^{はつかり}初狩町とともに^は波加利庄（^{はかりのしょう}波賀利庄とも）という庄園の置かれた地でした。波加利庄は、波加利^{ほんしょう}本庄と波加利新庄^{しんしょう}に分かれていて、^{ふるごおり}古郡氏という武士が所領していましたが、建暦3年（1213年）鎌倉幕府に対して反旗を翻した和田義盛^{よしもり}の乱に古郡氏が加担したため没収され、波加利本庄は武田氏に、波加利新庄は島津氏に与えられました。この体制は南北朝時代にも継続されていましたが、15世紀中ごろになると庄園としての実態は失われていたと考えられています。

笹子峠（1,096m）と清八山（1,593m）を水源とする笹子川沿いに発達した水田地帯は、大月市内有数の稲作地帯として現在でも利用されています。

江戸時代になると、寛文9年（1669年）の検地後、黒野田村から吉久保（^{くろのた}蘆窪とも）村、白野村が分村し、それぞれ黒野田宿^{あみだかいどう}、阿弥陀海道宿、白野宿として甲州街道の宿場を勤めました。

笹子の地には、国学者の黒川春村が「街道一の難所」と記した笹子峠があり、追分の人形芝居は、そうした難所を通行する旅人をもてなすためにも演じられたと伝えられています。



笹子川



笹子峠の頂上



黒野田宿本陣



白野宿の現在

街道随一の難所、笹子峠

甲州街道は、^{しもはなさき}下花咲宿を過ぎたあたりから急激に標高をあげる上り坂となります。難所の由来はこの標高差にあり、鉄道が開通した後も、初狩・笹子駅はスイッチバック方式を採用し、国道8号も^{みさかとうげ}笹子峠道を避けて御坂峠道が整備されるなど、交通に影響を与えてきました。

笹子駅前に建つ「^{ずいどう}笹子隧道記念碑」は、鉄道の笹子隧道の工事が国家プロジェクトであったことを示す巨大なものであり、甲府駅前から舞鶴城公園への移転を経て、現在地に移設されました。また、1952年（昭和27年）に公布された新



笹子峠に残る甲州街道

道路法により、国道8号は国道20号となり、区間も御坂峠経由から笹子峠経由に再度変更され、笹子峠の新たな隧道として新笹子隧道が1958年（昭和33年）に完成しました。

建設技術の向上により、笹子峠の交通は現在のように変化しましたが、笹子峠を越える甲州街道は今も一部区間において残されており、文化庁による歴史の道百選に選ばれています。



笹子駅前に建つ笹子隧道記念碑



国道20号 新笹子隧道

追分の人形芝居 その1 物語

三味線を伴奏に太夫が物語や台詞を語る「義太夫節」によって物語が進行されます。
「生写朝顔話」^{しょううつしあさがおばなし}、「伊達娘恋緋鹿子」^{だてむすめこいのひがのこ}、「傾城阿波鳴門」^{けいせいあわのなると}、「本朝廿四孝」^{ほんちょうにじゅうしこう}といった一般的な人形芝居の演目を得意としますが、笹子町吉久保に伝わる伝説を演目にした「吉窪美人鏡」^{よしかぼりじんかがみ}という追分の人形芝居独自の演目もあります。また、主遣いの口三味線による「追分人形式三番叟」^{さんばそう}という追分の人形芝居独自の三番叟もあります。



オーサイヤ オーサイヤ
このところのよろこびは
よそにはやらじとおもう

主遣いによる口三味線が特徴的な
追分人形式三番叟。

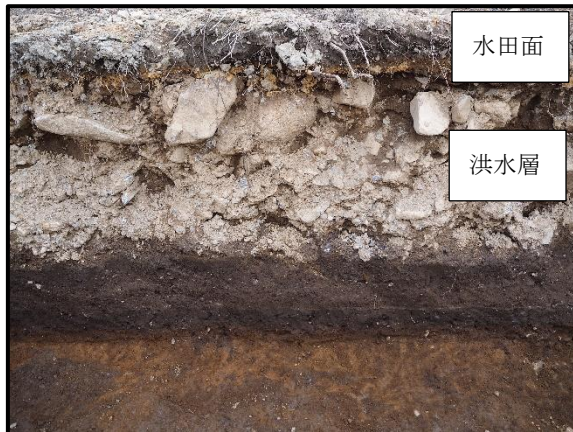
追分の人形芝居 その2 動き

追分の人形芝居は、1体の人形を三人の人形遣いが操作する三人遣いの人形芝居です。
主遣い^{おもづか}、足遣い^{あしづか}、左遣い^{ひだりづか}が息を合わせることで、喜び・悲しみ・怒りといった感情を表現し、観客に訴えかけます。



追分の人形芝居 その3 人形

追分の人形芝居は、1891年（明治23年）と1908年（明治40年）の水害によって、人形、衣装、舞台が流され、存続の危機に陥った過去があります。その後、初代座長天野忠甫・二代目座長福蔵の尽力により、近隣の人形座から人形のかしらを始め舞台道具が購入され、危機を乗り越えてきました。人形が揃わなかった間は人間を人形と見立てた「人形振り」による稽古も行われました。

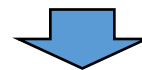


白野地区の大鹿川沿いで行われた発掘調査では、水田の下層から、洪水によってつくられた地層が約80cmの厚さで存在していることが確認されました。

確認された洪水の痕跡



三番叟と婆のかしら



打ち割り

追分の人形芝居 その4 保存会

追分の人形芝居は、座員の高齢化により、平成6年の公演を最後に10年活動が休止しました。休止の間、四代目座長天野宗光^{むねみつ}はバイクの荷台に人形を載せて地元小学校を中心に普及活動を継続し、文化を伝えることに尽力しました。

平成16年に大月市の市制50周年記念式典にて10分間公演を行い、人形芝居の魅力、人形遣いの想いを披露しました。それにより、翌年から追分の人形芝居を存続していこうという志をもった人々が集まり、見事に復活を果たすことができました。

笹子追分人形芝居保存会は、保存と継承を目的に設立され、天野茂仁^{しげひと}会長を中心に現在も保存・継承活動に尽力しています。



矢立のスギ前での公演



公民館での公演

座としての追分の人形芝居は、天野忠甫^{にしかわいさぶろう}が東京の西川伊三郎^{いくぞう}に入門し、西川伊久造^{いくぞう}の芸名を与えられたことから始まり、追分の地に座を興して西川一座となりました。

座長は初代天野忠甫^{ちゅうすけ}、二代目天野福蔵^{ふくぞう}、三代目天野晃^{あきら}、四代目天野宗光^{むねみつ}を経て、現在は五代目となる天野新一座長^{しんいち}が受け継いでいます。



稽古場の外観



新田地区の風景

追分の人形芝居 その5 演目

追分の人形芝居の得意演目として「生^{しょう}写^{うつ}朝^{あさ}顔^{がお}話^{なし}」、「本^{ほん}朝^{ちよう}廿^{にじゅう}四^し孝^{こう}」、「吉^よ窪^{しく}美^び人^{じん}鏡^{かがみ}」、「伊^だ達^て娘^{むすめ}恋^こ緋^ひ鹿^{かのこ}子^こ」、「傾^{けい}城^{せい}阿^あ波^わ鳴^な門^ど」、「壺^{つぼ}坂^{さか}観^{かん}音^{おん}霊^{れい}験^{げん}記^き」などがあります。そのうち近年公演された2つの演目について紹介します。

生^{しょう}写^{うつ}朝^{あさ}顔^{がお}話^{なし}

「露^るのひぬ間^まの朝^{あさ}顔^{がお}を 照^あらす日^ひ影^{かげ}のつれなきに

哀^あれひと村^{むら}雨^{あめ}の はらはらと降^ふれかし」

この歌を琴唄にして演奏している女芸人「朝^{あさ}顔^{がお}」。広島^{みやぎ}の秋^{あき}月^{づき}家^けの息^そ女^{じろ}・深^{ふか}雪^{ゆき}は、親の決めた縁談を嫌い、家出し、「朝^{あさ}顔^{がお}」となります。将来を誓った恋人、宮^{みやぎ}城^あ阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}を追いかけますが、降りかかる不幸に泣き続けたため、とうとう両目を泣きつぶし、盲目となっています。「朝^{あさ}顔^{がお}」の唄う歌は、宇治の蛸狩り^{たこかり}で出会った阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}が、扇に即興で書いた歌であり、「朝^{あさ}顔^{がお}」は恋人を探すためにこの歌を唄い続けています。

「宿屋の段」では、養子となり名を駒^{こま}沢^{ざわ}次^じ郎^{ろう}左^さ衛^ゑ門^{もん}と名を変えた阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}の宿泊する宿屋にて、二人は再会します。しかし、阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}はお家の絡んだ任務の最中、深^{ふか}雪^{ゆき}に正体を打ち明けることができず、また深^{ふか}雪^{ゆき}は盲目のため阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}を認識することができません。観客はそのもどかしさを感じながら「朝^{あさ}顔^{がお}」の唄を聞くことになります。阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}は、宿の亭主・徳^{とく}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}に、「宮^{みやぎ}城^あ阿^あ曾^そ次^じ郎^{ろう}事^{こと}、駒^{こま}沢^{ざわ}次^じ郎^{ろう}左^さ衛^ゑ門^{もん}」と書いた扇子を託し出発します。そのことを知った「朝^{あさ}顔^{がお}」は、「エエ 知らなんだ 知らなんだ 知らなんだわいなあ」と「知らなんだ」を連呼、あさましさ、恥ずかしさ、無念さが込められるとともに、三味線の演奏も叩きつけるような音色に変わります。そして舞台は「大井川の段」にて急展開を迎えます。

本朝廿四孝

「本朝」とは、わが国のことを指し、「廿四孝」とは中国の二十四人の親孝行物語をまとめた本の題名です。つまり「本朝廿四孝」とは日本の親孝行物語という意味の演目です。武^{たけ}田^だ信^{しん}玄^{げん}の息^{かつ}子^{より}・勝^う頼^{えすぎけんしん}と、上^や杉^え謙^{がき}信^{ひめ}の娘^{むすめ}・八^{やち}重^え垣^{かき}姫^{ひめ}の恋の物語で、和製ロミオとジュリエットとしての一面もあります。

主人公の八^{やち}重^え垣^{かき}姫^{ひめ}は、当初姫としての振る舞いを意識していますが、死んだ勝^{かつ}頼^{より}に瓜二つの人物（蓑^{みの}作^{さく}）に気づいてからは、徐々に行動が大胆になり、やがては恋ゆえに親を裏切る行動を起こします。「十^{じゅう}種^{しゅ}香^{かう}の段」では、この徐々に変化する乙女心が見どころであり、八^{やち}重^え垣^{かき}姫^{ひめ}、蓑^{みの}作^{さく}（勝^{かつ}頼^{より}）、濡^ぬ衣^{れぎぬ}（武^{たけ}田^だの間者）がコミカルに立ち回ります。

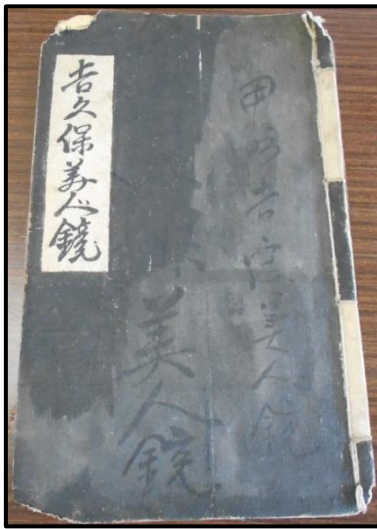
「奥^{おく}庭^{にわ}の段」では、八^{やち}重^え垣^{かき}姫^{ひめ}は暗殺の危機にある勝^{かつ}頼^{より}を救うため、「諏^す訪^わ法^{ぽう}性^{しょう}の兜」の力を獲得し、諏^す訪^わ湖^こを越えていきます。この能力獲得の場面では、人形入れ替えによる演出があり、白狐の登場とあわせて、もはや上品でおしとやかだった八^{やち}重^え垣^{かき}姫^{ひめ}の姿ではなくなっていくところに見どころがあるといえます。

追分の人形芝居 その6 吉窪美人鏡

「吉窪美人鏡」は笹子町吉久保地区に伝わる伝説です。話の筋がいくつかありますが、ここでは『甲斐国志』に記載されている内容を紹介합니다。

「土人の説には、僧親鸞^{しんらん}この地^{けいれき}を経歴^{よし}しの折から吉^{しつと}という婦女嫉妬^{どくじゃ}の念深く遂に毒蛇に化しぬ。その頃はこの地池沼なりしにその池に入りて往来の人を悩ましけることありき。親鸞これを済度^{さいと}のために名号^{みょうごう}を石に書いて池に投ぜしかば、毒蛇成仏しけるとぞ。」

追分の人形芝居の演じる「吉窪美人鏡」では、およしは修行中の若僧に恋をし、失恋の悲しみと逆恨みの念から毒蛇となる点に違いがあります。しかし、毒蛇済度および親鸞聖人念仏塚と刻まれた石造物は現在でも稲村神社前にあり、また名号を書いたとされる石を所有する住民がいるなど、この話が地域に結び付いた伝説であることを示しています。



「吉窪美人鏡」の床本



「毒蛇済度」の碑



「葦池」の碑



経石

市制 70 周年記念特別展

追分の人形芝居展

発行 令和 6 年 11 月 1 日

制作 大月市教育委員会

印刷 誠実堂